

自死遺族の意味再構成と宗教的物語

川島大輔(国立精神・神経医療研究センター)

人は死別に直面した際、その人自身のやり方で、その喪失体験を意味づけようとする。そしてその中心に位置するのは、「意味の再構成」というプロセスである。死別体験者は、物語の途中で中心人物を失った小説のように、それ以降の章は物語の辻褃が合うように書き直すことを余儀なくされてしまう (Neimeyer, 2002/2006)。そうした意味再構成のプロセスにおいて宗教や倫理の物語などの「聖なる物語」が多く語られ、とくに死別後の意味再構成と宗教的物語との関連について多数の研究報告がある (e.g., McIntosh et al., 1993; Milo, 1997; Davis et al., 1998; Tedeschi & Calhoun, 2006)。ところで語りとは文化に流布する物語をそのままに語るのではなく、それを引用しながら私ヴァージョンに語りなおす作業である (川島, 2008; やまだ, 2000)。また聖なる物語や受け入れやすい物語のみがあるわけではなく、差別や偏見をもたらす物語や個人の意味づけと相容れない物語もある。

ここではある自死遺族の語りに着目し、そこで語られるグリーフプロセスについて、意味再構成の視点から検討する。とくに、どのように意味を探し求め、物語に出会い、そこで意味を再構成していくのか、というプロセスに迫る。同時に、能動的な意味探求の果てに、大きな物語に意味を「ゆだねる」ということについて考えてみたい。